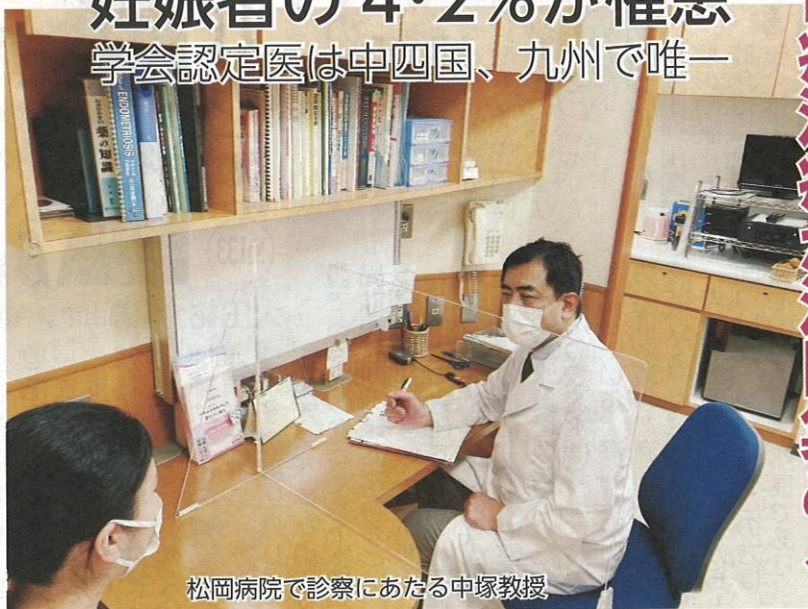


松岡病院の中塚医師

妊娠者の4・2%が罹患 学会認定医は中四国、九州で唯一



松岡病院で診察にあたる中塚教授

不妊症治療が注目集める



医療法人賢仁会(松岡蔵理事長)が運営する松岡病院(福山市宝町5-32、松岡亮平院長、電話084・923・0385)に妊娠しても流産、死産を繰り返す「不妊症」の患者が増えている。日本不妊症学会に所属する中塚幹也医師(岡山大学大学院教授)が外来を担当。近年の晩婚化を背景に国内でも妊娠した女性の4・2%が2回以上の流死産を経験するとされ、県内を中心に患者が受診している。

不妊症の原因は、子宮の形態異常、夫婦のいずれかの染色体異常、妊娠継続に必要なホルモンが低下する「甲状腺機能低下症」などに加えて、近年は、胎盤に血の塊ができやすい「抗リン脂質抗体症候群」が注目されている。甲状腺機能低下症では甲状腺ホルモン剤の服用、抗リン脂質抗体症候群であれば、血液を固まりにくくするアスピリンの服用やヘパリンを自己注射する治療を行う。

中塚教授は1995年から松岡病院に婦人科の非常勤医師として勤務。晩婚化が影響し、近年では初回の妊娠が平均30・9歳と遅くなっており、30歳代後半から40歳代前半で不妊症に悩

む患者が多く訪ねてくる。不妊症の女性は、流死産を繰り返すこと、職場で理解が得られにくいことから、うつや不安症になる率も高いという。

日本不妊症学会の認定を受けた医師は中四国、九州では中塚教授がただ1人。妊娠の高年齢化が進む中、流産率はさらに上昇するが、大半は適切な検査、治療を受ければ出産できるとされ、認定医の育成が急務だ。中塚教授は岡山県不妊専門相談センターのセンター長を務め、講演活動などを通じ、不妊症に関する啓蒙・啓発活動を進めている。

日本不妊症学会では2020年度から不妊症の検査や診断、患者管理の経験が15例以上で、研究論文が3本以上の産婦人科専門医を認定医としている。不妊症は繰り返す流産、死産で不安を抱える患者に寄り添った対応が求められる中、中塚教授は重要性を訴え、不妊症認定医の増加を期待している。